

美萩野臨床医学専門学校

利 光 央*

はじめに

本校、美萩野臨床医学専門学校は昭和49年地元医師会、福岡県臨床衛生検査技師会の温かいご支援、ご協力と地域社会の熱心な要請に応じて設立された。福岡県北九州市小倉北区のJR小倉駅からモノレールでわずか10分位のところに位置している。全国の養成校の多くは昭和40年代の全般までに創立されており、後発の学校としてスタートした。また検査の歴史と対比してみると昭和45年に現東京スペシャルリファレンスラボラトリー、46年に北里バイオケミカルラボラト

リーズ、50年に三菱油化メディカルサイエンス等々が設立され、検査の自動化と外注化に拍車がかかる時期にもほぼ一致している。また福岡県内の養成校としても、本校創立の後にすぐ設立された1校を加えると4施設、総入学定員200名という過密地域でもあった。縁あって創設から関わったが、将来の需給のバランスを考えると不安を感じないではなかった。今年で37周年を迎え、2,700余名の卒業生を送り出し、彼らは地域医療の一端を担って活躍している。教育は現在、臨床検査技師免許を持った専任教員9名と28名の非常勤講師で運営している。



写真 校舎全景

* toshimitsu@mihagino-mt.ac.jp

I. 本校教育の特徴

1. 設備の充実

科学の発達は日進月歩の観があり、特に臨床検査技師に要求される知識と技術も益々高まってきている。診断に際しての種々の精密な検査はもとより、人間ドックや集団検診等の予防医学、食品衛生や大気汚染などの公害分野においてもその知識は活用されている。

こうした状況の中、学生諸君によりよい環境で研修の成果をあげてもらおうと、逐次、施設設備を改善し新しい時代に即応できる検査技師の養成に取り組んでいる。ちなみに建物総床面積 4,434 平方メートルの中に、同時に講義できる 6 講義室、図書室、視聴覚室、情報処理実習室、専門分野実習室 8 (生化学検査学 1、生理検査学 2、微生物検査学 1、病理検査学 1、免疫検査学 1、一般・寄生虫検査学 1)、多目的実習室 2 を備え、3 年制の養成校としてはかなりゆとりのある施設を有している。また教育目標としては、「社会性、人間性の豊かな臨床検査技師の養成に努める。」を一貫して掲げている。

2. ローテーション実習

本校の専門分野の 8 実習 (生化学検査学実習、一般・寄生虫学実習、免疫・輸血検査学実習、微生物検査学実習、病理検査学実習、血液検査学実習、生理検査学 I 実習、生理検査学 II 実習) はそれぞれ 3 単位で構成しその 2 単位を 2 年次で履修している。幸いそれぞれの実習を同時に実施できる実習室設備に恵まれたことと臨床検査技師の免許を有する各専門分野の 8 人のスタッフ専任教員であることがローテーション実習という多分本校に独特の実習スタイルを可能にしたと思える。専門分野実習施設 8 室の大きさは 75 平方メートル～100 平方メートルであり、学生 80 名を 5 班、最大で 16 名で編成し、週 20 時間の実習を連続で行い (2 単位)、次にローテーションするシステムである。

メリットは少人数で実施することにより

- ① 技術的な問題はもとより教員と学生個々との接触が密になる。

- ② 指導者は個人個人の習熟度を把握しやすい。
- ③ 2 単位終了するまで毎日同じ実習を行うので学生は 1 教科に集中でき学習効果が期待できる。
- ④ 同じメンバーで 1 年間通して実習するので学生に連帯感・協調性の意識が生まれる。
- ⑤ 高価な機器を使用する実習でも少人数で実施すれば皆が効率よく利用でき教育効果が上がる。

逆にデメリットは

- ① 指導教員の負担が大変大きい。
- ② 同じメンバーなので緊張感を欠き馴れ合いのようなムードが生じることがある。
- ③ 実習に対する学生のスタンス (積極的・消極的 etc.) が固定される。
- ④ 班の構成メンバーを 1 年間ずっと代えることができない。等々。

ずいぶん長い間この方法で学内実習を実施しているが十分に成果が上がっていると考えている。

3. 学生の研究活動

本校の教育の特徴の一つにゼミ活動が挙げられる。講義や学内実習では受け身になりがちなので学生自身が主体的に興味あるテーマを選び、研究を行う場を設けている。内容は生理検査 2 パート、生化学検査、微生物検査、病理細胞検査、一般・寄生虫検査、血液検査、免疫検査で 8 つのゼミを開講している。2 年生のほぼ全員がどれか希望のゼミに所属し、主に課外に活動し、その研究成果を文化祭に発表して学習意欲への励みにしている。また将来へ向けて検査技師会関連などの学術集会での発表へも取り組んでいる。

4. 今後の課題

臨床検査技師養成は平成に入って急速に大学教育へ移行しつつある。現在のところ全国の入学総定員の約半数を大学と 3 年制教育とが担っているが、医学検査は日進月歩で質と量で拡大しつつある今日、3 年制養成施設がどのように対応すればいいのかは直面した難しい課題である。もちろん、学部教育、大学院教育は 3 年制教育に比して高度な目標が設定できる。しかし養成校では限られた 93 単位 (本校では 108 単位) の範囲内で成果をあ

げなければならない。どのような技師の養成が時代のニーズにあっているかを模索しながら毎日の教育に取り組んでいる。実際、国家試験に合格して卒業生が働く検査の現場の職務は他の職種には見られないほど多岐にわたっている。あえて特化せずに基礎・基本に忠実に、どの検査へも興味を示し、かつ柔軟に対応できる懐の深い医療従事者の養成が3年制教育機関の生き残る道かもしれない。

II. 就職対策とふさわしい学生の確保

私学の3年制養成機関の存続の可能性は、ふさわしい学生の確保と職場の提供であり、切り離しての議論はできない。臨床検査技師の需給バランスについては昭和49年の本校設立時から私の最も懸念する不安であった。いつ飽和状態がやってくるのか「国民衛生の動向」「日臨技の年齢別会員数」などの統計資料を検討しつつ常に解析していた。不安が的中し本校への求人数は平成6年ころをピークに急激に減少、この時期頃から飽和の兆候が出始め、さらに就職難に拍車をかけたのは臨床検査業務がいい仕事であるが故の離職率の低さである。問題はこのトンネルに出口があるのか、あるとすれば何時頃になるのかという素朴な疑問であった。実際、現在の病院等検査室の年齢構成

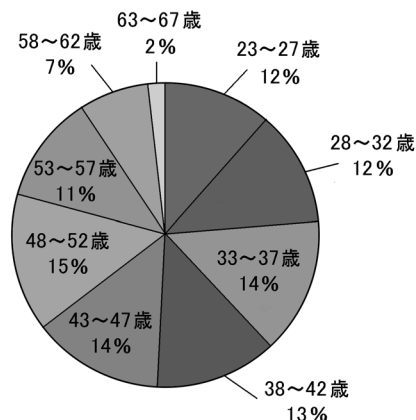


図1 臨床検査技師の年齢構成(平成18年度)

をみると若い層が極端に少ない事実は皆さんが感じている通りである。図1は臨床検査技師の大方の年齢構成を示したものである。昭和33年に制定された衛生検査技師法に基づく検査技師教育もようやく50年を超え定年に達する技師が出始め、さらにその退職が団塊の世代に入ってきたことがグラフにより理解できる。本校でも3年ころ前から求人が急増し出口問題は概ね解消されつつあると考えている。そのことが社会や受験生に浸透し臨床検査に興味を持つ受験生の増加へ跳ね返るよう期待しつつ毎日の教育に取り組んでいる。